

平成30年度京都市景観市民会議の結果報告

日時：平成30年9月29日（土）午後2時から午後5時
場所：下京区役所4階 会議室

テーマ：新景観政策の更なる進化

プログラム

第1部 話題提供 14:00～

- ・開会挨拶
- ・話題提供① 京都市
「持続可能な都市構築プラン（仮称）」骨子案の市民意見募集について
「京都市新景観政策の更なる進化検討委員会」について
- ・話題提供② 門内 輝行 氏（大阪芸術大学教授，京都大学名誉教授）
京都市の景観政策と「新景観政策10周年記念事業」について

（休憩 10分間）

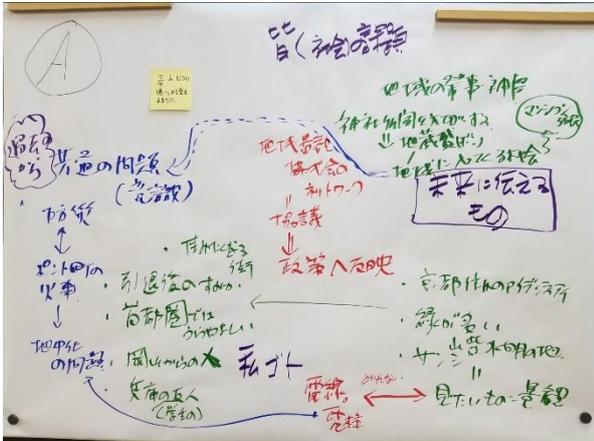
第2部 ワークショップ 14:50～

第3部 全体会議（総括） 16:15～

終了 17:00

□ワークショップで出された意見の概要

A テーブル



まず現在メンバーが考えている問題、電線の地中化や三山の問題などを出し、その後、実際の生活、景観を形成しているものの中から、将来につなげていくものを挙げてもらった。

地域コミュニティの崩壊が話題提供にあったが、小さなコミュニティはまだある。子どもを介して地蔵盆などに参加することによって、賃貸マンションの住民でも別の機会の中からでも協力いただける。そのような環境ができるという話があった。コミュニティ崩壊の現状をどう展開していったら、景観形成につなげていくかという課題がある。

共通の課題として、顔を見て初めて共通の話題というものが出てくる。例えば、先斗町の火事の事例。不幸な事例ではあるが、そんなことがあったからこそ、地域の防災意識が高められたということがあった。

発展的な地域では、地域景観づくり協議会を作っている。ここではネットワークが形成されている。そこで話されていることを政策に反映させることが必須ではないか。

京都の魅力は、緑が多いところ。山紫水明。そのような見たいものが、景観の中で見られないのが課題。

B テーブル



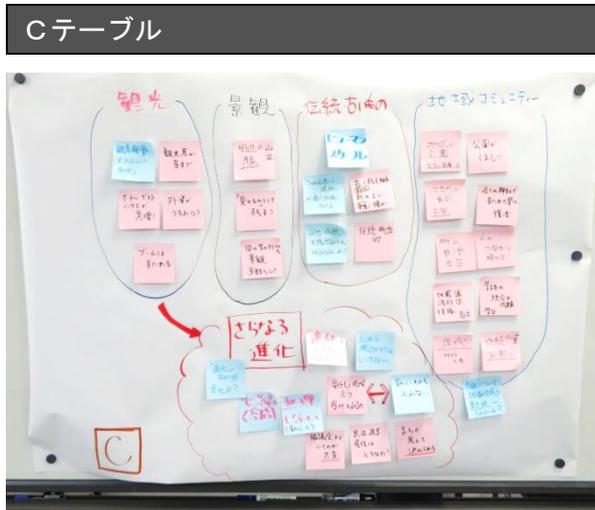
京都らしさに共通のものが出た。古いものと新しいものが混在しているのが京都。路地の幅等、その距離がコミュニティの距離。防災バケツを並べている地域がある。それが人が醸し出す景観になっている。地域にはいろんな宗教が混在しているが、何となくまとまって一つの景観になっている。これからの景観で一番肝心なものは、コミュニティではないかということになった。

マイナス面では、マンション、ビルの変な和風底などがある。コインパーキングは建物として建っていないから規制されない。建っていないから規制されないというのはどうなのか？ほかに、廃校になった小学校。防災時にみんなが集まれる場所がない。世代を超えて集まれる場が少ない。

地域に景観を取り組んでいる人はいる。ただ、みんなが関心を寄せているわけではない。どの世代にも通じているわけではない。みんなが目にして、家族で話し合うような機会があればよい。そのような広報の仕方が必須では。政策に関して立派な資料があるが、市民が家族で話をするネタになるようなものではない。

今後何を中心にしていくか？地域から全体へという方向性が重要。これまでの10年間の景観は全体を見ていき、整えていく方向だった。そうではなく、地域のそれぞれの特色があるのだから、地域をひとつずつ固めていくことによって全体の良いバランスが取れるのかもしれない。これからの10年はコミュニティが大切。価

価値観の調整は難しいが、若い人たちにも考えてもらいたい。情報や、必要な視点などを、現在取り組んでいる世代から伝えていく必要がある。



京都の大切にしたい価値観を観光、景観、伝統、地域の4つに分けた。観光は否定的な話が多かった。観光都市であることの面倒くささ。宿泊施設も外資が潤っているだけという、否定的な意見が多かった。

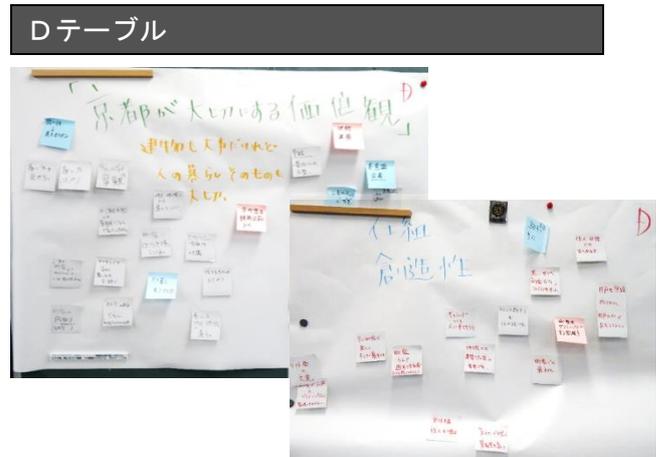
景観に関しては、周辺の山が話題になった。東京にはそういうものがない。京都らしさとして大事にしたいもの。ただ、それが見世物として残っている面もある。田の字エリアの外でも京都らしい景観があるので大事にしたい。

古い建物、まちなみを大切にしたい。なぜ伝統を残さねばならないのか、改めて考える必要もある。

地域コミュニティについては、大きな公園などはあるが、子供を遊ばせる身近な公園がないという意見があった。地域のお祭りが人のつながりにつながる。東京には無い体育振興会なども自治連合会の中にあり、体育祭などを実施している。そういうものも京都は多く残っているので、それを大事にしていくことが大事。

景観政策の更なる進化について、『進化』とは何かを考えた。新しいものを全く受け入れなければよい、という意見もあったが、新しいもの

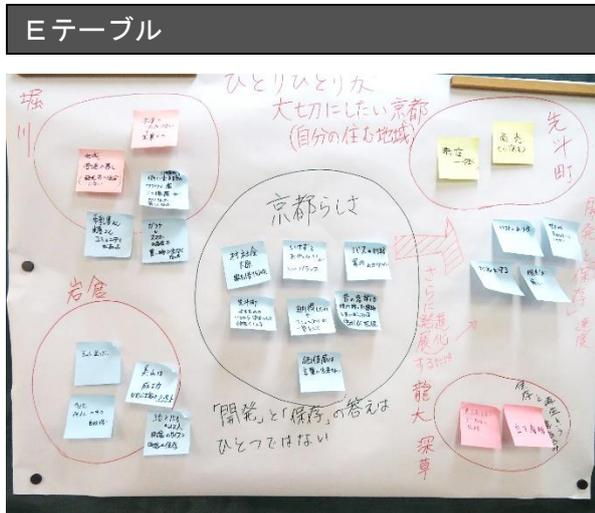
をどう受け入れていくのか、ということを考えていかないといけない。新しい建物、外から引っ越してくる住民、観光客、それらの受け入れ方をどう考えていくのか。それを、まちが、地域が、考えて決めていける仕組みが必用。ただ、それは非常にハードルが高いことなので、専門家の育成や、行政の支援などを含め、まちの人たちのレベルアップをしていかないといけない。



京都が大切にしたい価値観は、建物も大事だが、人の暮らし方も大事。景観という言葉には、まちなみもあるが、家の中の景観もある。暮らしの中にある景観。その上で、京都に住んでいるという誇りを持つということも大事。京都の町家は、『狭い』『寒い』『暑い』など、住み辛さもあるが、そういう住みづらさも含め、住み方を次の世代に引き継いでいくことも大事。京都の町家に住んでいると、知恵が必要だし、その知恵を持っている年寄りも多く住んでいる。

町家に誇りを持つ、美しさの意識を持つことも大事。暮らし方そのものに誇りを持つ。昔からの暮らし方を知らない人に知ってもらうことも大事。その手段として、若い世代の人に、ハードルの高い定住をしてもらうのではなく、シェアを試みたり、週末暮らしを体験する町家版などをやり、町家の良さを理解してもらうことも大事では。若い世代は、町家に『住む』というより、カフェなど店舗としての使い方のほ

うがなじみが深い。残していくには、それぞれが好き勝手なことをするのはではなく、地域での建築協定なども必要。



一人一人が自分が暮らす中で、京都が守るべき価値を出してもらった。岩倉でお住まいの方は、だんだん五山の送り火が見えなくなってきたので、せめてそこは守っていききたいという意見。社寺の中まで自動販売機がありすぎる、という意見が出た半面、自動販売機は町家にぴったりのサイズで、3台置くと月10万円くらいの収入があり、町家を守るための大切な資源となっている一面もあるという意見があった。

美山は成功した。かやぶきコンサートなどをやって、人気がある。(⇒美山町でなく、日吉町?) 大原などは、気位が高く、住むにもなかなか家も借りられないムラ社会。美山のような守り方をしてはどうか。

河原町に出たときにわくわく感、高揚感がないというのは、ネオンが無くなったことにもある。スマホ世代は買い物に外に出ることが無くなり、河原町は買い物ではなく、遊びに行く場所が変わってきている。

昔の普通の暮らし、観光客に迎合しない、生まれながらの職業をしている人の暮らしの佇まい、そういう普通の暮らしを守っていききたい。牛乳屋さんが配達してくれたり、米屋さんがあ

ったり、昔からのコミュニティを守っていききたかった。職住一体の町家も守りたい。

京大の立看板まで規制する必要があるのか? という意見もあった。

皆が大切にしたい共通認識のものがあるかというとなかなか見つからないが、『いけず』と『おせっかい』がいいバランスであるのが京都らしさ。『おせっかい』は例えば、町内会で、今日は体調が悪いので休むという、なんで? どうして? と突っ込まれる。そういう昔の意識がそのまま残っている京都らしさ、それがコミュニティ内での信頼、信用の担保になっているのではないか。

発展・進化するには、開発と保存の速度が速すぎる。この10年間で京都はいろいろ開発されてきたが、そんなに急がなくてよい。3年生の勉強ができていないのに、4年生の参考書を押し込むのではなく、もう一度3年生の復習をするような、景観づくりにもそういう時間のゆとりがあったほうが良いのではないか。

□全体会議(総括)の概要：門内輝行氏

■ヒューマンネットワークの重要性

京都の中には、地蔵盆など人と人がつながる場がある。それは大事な資源の一つ。地域の中で、コミュニティで、景観やまちづくりの話が恒常的にできる都市というのは他にあまりない。自治連合会などの中につながりを作り出す、そういう祭りや地蔵盆などの手掛かりがまだ残っている。ニュータウンにはない、人のつながりを作り出すネタがある。反面、抗いや問題も多く発生するが、うまくやるとそれがつながりに発展する。つながりがあるということは、近代では煩わしかったかもしれないが、これからはそのつながりが資源になってくる。人と人がつながっているというヒューマンネットワークが資源。

コミュニティは新入者には厳しい面もあるが、そこを乗り越えたとすごく居心地がよくなる。京都の中に、見えていない部分、意識していない部分があり、それを意識していると、煩わしいものではなく、未来を開くものとして、とらえられる。人と人だけでなく、人と山、といったつながりもある。東山が見えていることで、人と人の中に会話が生まれる。共通の話題をもってつながれるということが、景観を守ることにつながっていく。京都の景観を共有すること、一緒に対象を眺める『経験』が大切だ。

■コトバでの表現

『まちづくりに取り組む際には、その地域を診断する必要がある』と、クリストファーアレクサンダーが言っている。健康な地域も病んでいる地域もある。それを話し合う、まちの強みと弱みを見極めながら話し合うことが大切。嵯峨野のように、美しい景観が有れば、人は、歌に歌ったり、詩を書いたり、写真を撮ったりする。そうすることでまたその地域のイメージが強化

されていく。すると、歌に合うようにまちを作り替えていく、それがまた歌になっていく。このように言葉や音楽にして表現していくことも大事。それが、皆が共有していくことにつながる。そこに景観があるだけでなく、広い意味でのコトバ、つまり絵や音楽にしていく、表現することが大事。それが地域での共有のスタートになっていく。

■景観づくりとコミュニティ。

昔は農村があり、みんなで一緒にコメ作りなどをやっていた、その姿が景観になっていたが、今はみんな別々の職業で働いているから、協働する必要が無くになっている。京都の景観が壊れているのではなく、バラバラになっている社会に我々が生きているということ。その社会の有り様が可視化されて見えているだけ。それが汚いと思うのであれば、我々の社会が汚いということ。現代の景観づくりというものは、コミュニティがあって景観づくりをするのではなく、景観づくりをしていくことを通して、風景を共有していくことで、コミュニティを作っていくということ。赤の他人が夫婦になって、子どもができ、子どもを育てていくことで、家族になっていく。景観づくりもそのようなもので、子どもに相当するものが景観。景観を作っていくことで、コミュニティができていく。コミュニティを作っていくことが 21 世紀の最大の課題の一つ。人は一人で生きておらず、つながりの中で生きている。

そのための政策は、トップダウンではなく、ボトムアップが大事。今後の景観政策についても、市民から出てきた提案を制度に組み込んでいくことが必用。場合によっては、地域で決められることは決めてもよい、というようなイタリアの制度のようなものも考えられる。ただし、それには市民が力をつけることが必用。権限を与えられても、それを使いこなせないことがある。同時に専門家も育てていくことが必用。市

民の想いをサポートしていく専門家が居ないと、難しい制度を活用していくのは難しい。

■観光と景観

昨年の連続講座の際にも観光の問題を取り上げた。観光を推進することは、下手をするとテーマパークになってしまい、観光客のためにまちが歪んでいく面がある。京都大学の若林氏が、『観光とは関係なく景観をしっかりと良くしていく、まちをよくしていくことが、景観につながり、観光をよくしていくことにもなる。観光を目的にしてはいけない。』ということ、話しておられた。

観光はよく考えてみると、情報産業であり、見られて減るものではなく、『新しい経験』を売り物にしている。最近ではゲストハウスが増え、いたるところホテルブームで、ありとあらゆる宿泊の形態が出ている。観光客が来てくれること自体が悪いことではない。しかし、表面だけではなく、京都の深いところに入ってもらい、経験をしてもらうというような、新しいツーリズムの在り方も、受け入れるほうと一緒に、そんな観光の在り方を開発していく必要がある。

■統一性と差異性、多様性

景観について、『地域住民の意思統一がされている』ということとはなかなか難しいことだ。傍聴者のコメントの中にも、『共通部分を取るということは景観では難しい』というものがあつた。『だからまとまらない』と言われるが、まとまらないからこそ、面白い。いろんな感性があり、いろんな人がいる、そういうことを話し合っていく中で、他者との違い、価値観の違いが見えてくる。それが出発点。意思統一というより、多様の統一。みんな同じだが、みんな違う、ということが同居できるようなことが大事なこと。統一性と差異性、多様性ということは、同居できる。全員が同じではなく、共通部分を持っているが、それぞれの違いは認めるということ。

例えば格子戸。格子は、どのまちも持っているもの。ただ、その格子も、米屋格子、酒屋格子のような力強いもの、糸屋格子のように、上部を開けて作業場に光を取り入れやすくしたものなど、多様性がある。『みんな同じだが、みんなそれぞれ違う』とすることができる。そういった共通性と差異性が同居できるような在り方を開発してきたのが京都ではないか。意思統一というよりは、多様性を認めながら統一していけるような方向性が必用だ。

■新しいものと古いものの共存

新しいものと古いものがなぜ必要なのか。そもそも人間というものはそういうもの。生命科学の本を見ると、人間は2、3か月で全ての細胞が入れ替わっているらしい。古いものと新しいものの新陳代謝が起こって、初めて生命がある。そういう意味では、特別鼎談の際に私が言った、インテリアの話もそういうこと。子どもの受験期に入り、マンガ本を全て片付けてしまい、全て参考書にすると、子どもはきつとおかしくなってしまう。昔のものを残しながら、少しずつ新しいものを入れていくことが大事。インテリアの保存と開発。人間というものは、連続した存在であり、自分の存在を確認しながら、帰るところがはっきりしているから、飛躍できる面がある。冒険するには、安心して依拠できる場所が必用。過去の古いものと、新しいものが如何に同時に存在できるか。人間という存在は、歴史に身を置きながら、新しいものも取り入れる、それで生命が保たれる。生きるということはそういうこと。そういった新陳代謝ができるような仕組み、つまり、地域が決められる部分、方針は決めておくけれど、あとは地域で決めてください、という部分が景観政策にあってもよい。

■景観力の育成

その際に地域は、自分の地域がどういふ地域

なのかを見ておかないといけない。そういう意味では、小学校くらいから景観教育を進めたほうが良い。見る目、力を育てていく必要がある。洛央小学校での事例では、小学生にレゴでまちなみを作らせた。3層の高さ制限を設けると、『面白くない』という意見が出た。それで美風審の会長名で、『特別に高さ制限撤廃』と言うと、あべのハルカス型等をどんどん建て始めた。しかし、それらを持ち寄ると『このまち、汚い』と言い出し、最終的に高さをそぎ落とし、調整してまとめ、小学生は、高さ制限も必要だということに気付いた。

■暮らし方のデザイン

建物も大事だが、人の暮らしそのものが大事。つい見えている建築のほうに目が向くが、その中で行われている暮らしや暮らし方が大切だ。京都は生活文化が洗練されているまち。最近ではデザインの世界でも、これまではモノをデザインすると考えてこられたが、そうではなく、人の経験、エクスペリエンスをデザインするということが向いている。そういう面で言うと京都は素晴らしいエクスペリエンスを持っている。それには作法も必要で、そういうものも伝えていかねばならない。従来のものでなく、新しい暮らし方、新しい町家文化も作っていかねばならない。そういった創造性も必要だ。

■小さな変化の積み重ね

一人一人が大切にしたいものをすり合わせていくという対話の中から、開発と保存の問題を考えていく。開発はここでやり、保存はここでやる、という分離のやり方はうまくない。一つの場所で、保存と開発を同時にやっていくためのロジックが必用。そのためには、速度、時間というファクターが大事。計画理論の中では最近それを、インクリメンタリズム、微増主義という言葉で言われている。いっぺんに大開発するのではなく、ちょっとやって様子を見て、何

かあれば少しずつ変化させながら実行する、という計画の論理が注目されている。大きいことをやるのも大事だが、例えば、家の先に花を一輪飾る。それだけでは大したことではないが、その通りの50軒すべてが花を一輪ずつ飾ると、それは花のある通りになる。一人一人に出来る小さなことでも、集まると素晴らしい大きな変化が起きるということもある。大きな変化も大事だが、小さなできることを積み重ねていくことも大事。それを都市計画の理論では、タクティカルアーバニズムという。戦略ではなく戦術的な小さなこと。みんなの力を集めていくということがまちを変えていく力になる。そういうものが今注目されている。花一輪でも、みんながやると力になっていく。大きなことを大きくやるよりも、少し小さなことを集めていく。そうするとその力が見えてくる。それには必然的に時間が必要になる。

■ヒューマンスケール

一軒一軒の敷地だけで問題を解くというのには無理があるため、ヒューマンスケールのエリアで問題を考える。京都の一条は120m。120mに5mの間口の町家を並べると、24軒が並ぶ。両側町で48軒になる。この50軒程度というのは日本の集落の平均の大きさ。日本の村というのは50戸程度。ちょうど50軒程度で、町ができるように都市の構造ができています。アメリカの都市開発で有名なポートランドは、60m。50m~100mくらいが人間の集落のスケールになっている。東大時代私が助手をやっていた建築家の原広司氏は、集落の研究をしていた。よく『集落って100mだよ』と言っていた。まち並みの写真は面白く、まち並みの写真を見ると話は尽きない。一軒の家を見て話をすると、批判もできず、みんな黙ってしまう。しかし、何十軒と並ぶと、『子どものときここでこけたよね』とか、まちのストーリーが出てくる。それが50m~100mのヒューマンスケールにはある。

そういうエリアで、コミュニティで、ものを考えていく必要がある。

■文化を活かしたクリエイティブ都市へ

京都には歴史と文化がある。これが一番大事。これからの新しいイノベーションの時代、文化の無いところに新しいクリエイションは生まれない。歴史の無いところに新しいものは出てこない。そういう意味で、京都は21世紀の新しいクリエイションの素地がたくさんある。パナソニックがパナソニックセンターという世界に4か所の拠点を、大阪ではなく、京都に作る。オフィスがないので、苦勞したといていたが、なぜ京都でやるのかと聞くと、ブランド発信力と色々な人が来ていることを挙げた。外国人を雇う際、京都だったら来てくれる。外国人は、京都に住むんだったら行ってもいいという。

先日、LINEの人にもインタビューした。東京、福岡に続く拠点が京都にできた。京都だったら外国人が世界から来てくれる。そういうグローバルな中で見たときの京都の魅力はすごいバリュー。だから京都は、世界から色々な人が来て、いろんなところへ開放していくという、そういう意味では世界に開いていく創造都市。新しいクリエイション、これからの創造というのは文化が生まれること。経済も文化が主導、新しい経済というのは文化を基盤としているという形態。その資源を一番持っているのが京都。大学もあり、人的資源が多く集まっている。その宝物を活かしてクリエイティブな都市にしていく。そういう意味で、エリアで考え、コミュニティで考え、文化で新しい経済をやることを先導していく可能性に満ちた都市。それを阻害しないように、みんなで作っていただけるような制度を設計するというのが更なる景観の進化。規制法から創造法へという方向で考えていく。